大分県史跡臼杵城跡

小さな城からみえる、大きな歴史の波

弘治２年（1556）、大友義鎮（宗麟）によって臼杵湾に浮かぶ小島（丹生嶋）に城が築かれました。「臼杵の城」と当時のイエズス会宣教師たちがローマに報告したこの城は、豊後大友氏が最も華やかな光彩を放っていた16世紀末期に、その居城として世界に広く知れ渡っていました。

大友氏が改易された文禄２年（1593）以降、豊臣秀吉の部将である太田一吉が城主を務めたのち、関ヶ原合戦直後の慶長５年（1600）からは、美濃から入封した稲葉氏が廃藩置県まで15代にわたってこの城を居城とし、臼杵藩の支配にあたっていました。

臼杵城は守護大名の拠点城郭に始まり、日本の築城技術が著しく進化した安土桃山時代にあって、その担い手である豊臣系大名の修築を受け、さらには泰平の続く徳川政権下の大名の居城として整えられるという、まさに日本の中世から近世への移り変わりをよくあらわしている希有な城郭史跡でもあります。昭和41年（1966）には、大友義鎮（宗麟）時代から城郭存廃決定までの間、城郭化されていた丹生嶋が大分県史跡に指定され、臼杵市は現在もその遺構の保存と活用を行っています。そして、この城跡は市民や観光客の憩いの場として親しまれています。

時代とともにこの城郭はどう変わっていったのか？
それをここで探していると見えてくるものは日本の歴史そのものの姿なのかもしれません。

県史跡臼杵城跡へのアクセス

【列車ご利用】
JR 日豊線臼杵駅より
徒歩５分（卯寅口）
徒歩 15 分（古橋口）

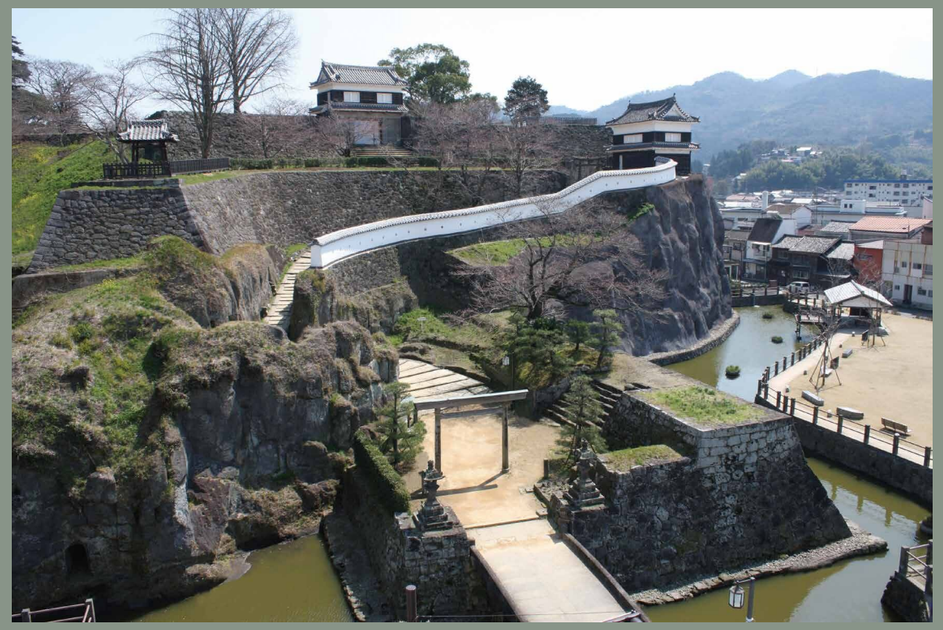
【お車ご利用】
東九州自動車臼杵 IC より 10 分
臼杵港フェリーターミナルより５分

発行　　臼杵市役所 産業観光課
お問合せ先　臼杵市教育委員会 文化・文化財課
臼杵市大字臼杵72番1
TEL　0972-63-1111

2022.8

大分県指定史跡

臼杵城跡



臼杵城跡散策マップ

③ 井楼櫓台石垣（せいろうやぐらだいいしがき）

城下を一望できる重要な櫓で、臼杵城内で最も規模の大きかったものです。櫓台石垣「築石」は、やや小ぶりですが、表面加工をせずに積んでいることや角石積みが規格的でないことから、17世紀初頭のものとみられます。

② 畳櫓（たたみやぐら）

天保年間に再築された櫓で、１階と２階の床面積が同じ「重箱造り」という古式の構造をしています。
解体修理の際に、下見板で隠された銃眼「隠し狭間（かくしさま）」のあることがわかりました。

① 古橋口と鐙坂（ふるはしぐち　あぶみざか）

大友時代から登城路として使われていた道で、外敵を防ぐため岩を掘り切って造った狭い道です。馬の鐙に似ていることから、「鐙坂」と呼ばれました。
太田氏時代には内堀をまたぐ橋が掛けられ、稲葉氏時代に「古橋」と呼ばれていました。

④ 大門櫓（だいもんやぐら）

17世紀初頭に城内通行の利便を高めるために造られたと思われる櫓門で、17世紀後半に二の丸居館ができると玄関口のような存在になりました。
平成12年に模擬復原建物が整備されました。両脇の石垣は18世紀後半とみられる「亀甲積（きっこうづみ）」です。

⑤ 時鐘櫓跡（ときかねやぐらあと）

稲葉氏入城後に造られた時報施設です。元禄14年(1701)に時鐘楼（じしょうろう）が二王座に移されるまで鐘が置かれ、臼杵城下に鐘で時を報せていました。
この櫓を造る直前の整地層からは、十字架を刻む軒瓦が出土しています。

⑯ 卯寅口門脇櫓（うとのくちもんわきやぐら）

嘉永年間に再築された櫓で、鉄砲薬櫓（てっぽうくすりやぐら）とも呼ばれ、火薬庫としても使われていたようです。
１階と２階の床面積が同じ「重箱造り」という古式の構造で半地下式となっています。

⑮ 武具櫓跡石垣（ぶぐやぐらあといしがき）

下半部は、規格的な「算木積み」が17世紀前半の特徴をみせています。
上半部はその後、積み替えが行われています。

⑭ 鉄門桝形石垣（くろがねもんますがたいしがき）

鉄門桝形は本丸の入り口となる重要な場所です。
長径1.5mにおよぶ大きな「築石」を用いる重厚な石積みです。「角石」は規格的な「算木積（さんぎづ）み」で、17世紀前半の特徴をみせています。

⑥ 腰曲輪石垣（こしぐるわいしがき）

海鹿櫓南側腰曲輪石垣は、築石が小ぶりで横目地がきれいに通る「布積（ぬのづ）み」です。
19世紀前半のものとみられます。

⑦ 今橋口（いまはしぐち）（今橋登城路）

稲葉氏入城直後に造られた登城路で今橋門・中門・上門の各「桝形（ますがた）」が連続する、防備の固いルートです。
鐙坂より広い道であるところが近世城郭風です。

⑧ 二の丸居館北石垣

最大高さ約７mの、現存する最も大規模な石垣です。上から３分の２は江戸中期以降に積替えを行っていますが、下部は17世紀前半の状態を保っています。

⑨ 二の丸居館庭園跡

臼杵護国神社境内は、延宝３年(1675)に城主居館が移された場所です。
現在、地上遺構は全く見当たりませんが、わずかにその庭園の一部が、残されています。

⑩ 近世の帯曲輪（おびくるわ）と埋門（うずみもん）跡

稲葉氏以前は、大門櫓前から天守下の空堀にいたる帯曲輪を通って本丸・二の丸に上がっていました。
17世紀初めに今橋口が整備され、上ノ門東から空堀に至る区間に短縮されました。その際、二の丸からここに入る門として埋門が設けられました。見学路に表示している線は、帯曲輪と今橋登城路を分断する石垣の跡です。

⑪ 天守台石垣

大正時代に上半４mほどが壊されてしまいましたが、もともとは７mの高さがあった石垣でした。
臼杵城内に残る唯一の16世紀の石垣で、表面調整を行わない大ぶりな築石、規格的な積み方をしていない角石など豊臣時代の雰囲気をよく伝える石垣です。

⑫ 空堀（からぼり）

本丸と二の丸を隔てる空堀で、大友時代からの北側堀と、17世紀初頭に造られた南側堀があります。南側堀は稲葉氏入城まで、大手門から本丸に至る登城路としても使われていました。

⑬ 本丸塁線石垣（ほんまるるいせんいしがき）

鉄門南側の塁線石垣は、やや大ぶりの築石を隙間を空けて積むという17世紀前半の特徴をみせています。上半部は「布積み」が崩れ、積替えを行っているようです。

義鎮はなぜ臼杵に？－宣教師たちがみた臼杵城

鎌倉時代から続く守護の名門大友氏の21代当主大友義鎮（宗麟）は、弘治２年（1556）大友氏代々の本拠地であった府内（大分市）を離れます。イエズス会修道士ルイス・デ・アルメイダはその事情を「**よりいっそうの安全をはかるために新しい城に引き籠りました。**」と記録しています。その「新しい城」とは臼杵城のこと。臼杵湾に浮かぶ丹生嶋の岩上に建つ北・東・南の三方が海に囲まれた天然の要害でした。

このころ、豊後を訪れていた司祭ガスパル・ビレラは、謀反を起こした家臣たちから逃れ、安全にその対策を行うために「**城のごとき島**」へ移ったと記録しています。

府内に比して極めて高い防御性をもつ臼杵城は、義鎮の入城から天正15年（1588）の大火で焼失するまでの間、大友宗家の居城として機能していました。臼杵城は、府内における大友館と詰の城であった高崎城の機能を併せ持つものでもあったようです。

大友義鎮（京都 瑞峯院蔵）

固い防御と都ぶりの居館施設

イメージ図

居館と防御のふたつの機能を持つこの城には、大友当主である義鎮や嫡子義統が政治を行う「**御殿**」、その家族が住む「**屋敷**」や「**蔵**」があったと、宣教師たちが記録しています。

最近の発掘調査によって、「御殿」や「屋敷」は現在の臼杵護国神社周辺に建てられていたこと、桧皮葺の屋根に漆喰壁といった、京都の高級住宅の様式を取り入れていることがわかりました。当時は、本丸が島内の西側に築かれており、高級陶磁器類をはじめ、儀式で使用される京都系土師器が大量に出土しています。

なお、大友義鎮は弘治２年以来、ずっと府内の館には戻らないままでしたが、臼杵城跡出土の遺物と大友館跡（府内）出土の遺物を比較すると、臼杵城からは義鎮時代のものしか確認できません。義鎮以前の高級磁器が出土する大友館跡（府内）は、やはり大友氏の本拠地として意識されていたようです。

火災層出土遺物（16 世紀後半頃）

地盤面と火災層

ミニ情報

天正 14 年（1586）11 月、島津軍が臼杵を攻めた際、義鎮は臼杵城下やその周辺の領民たちに臼杵城に避難するよう呼びかけました。城内に集まったおびただしい数の領民たちは飢えと寒さに襲われましたが、城主義鎮やその娘たちが、我が身にかまわず避難民の救助活動を行っていたと宣教師ラグーナは記録しています。

石垣と天守

ー豊臣系大名の臼杵城　1594 年～ 1600 年

小さな大坂城ー中世城郭から織豊系城郭へ

大友氏滅亡（文禄２年 1593）後の文禄３年、臼杵城には太田一吉（在城期間1593 ～ 1600年）が城主として入城しました。一吉は大友時代の臼杵城を、織田信長の安土城、豊臣秀吉の大阪城のような、石垣と瓦葺の櫓を数多く造り、丹生嶋西側の砂州を埋め立てて三の丸を整備しました。太田氏のこうした整備により、臼杵城には31 基の櫓と、７基の櫓門が設けられ、この時代の流行に合ったいわゆる織豊系城郭へと変貌したのです。

また、太田氏の改修の際、はじめて天守が建造されます。現在もなお天守台の一部が残されていますが、石垣隅の角石の積み方からみると太田氏の時代にこの天守台が築かれたようです。現存する天守台石垣では、佐賀県の肥前名護屋城に続き、古いものです。

16 世紀末に造られた天守台石垣

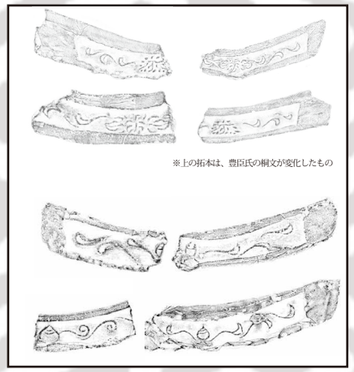
大逆転！
入れ換わった本丸と二の丸

最近の発掘調査で、太田氏時代に本丸が丹生嶋の東半部に築かれたことが判明しました。つまり大友時代の主郭（本丸）と副郭（二の丸）がそっくり入れ換わってしまったわけです。

大友時代の主郭は、丹生嶋の最高点に造られていましたが、太田氏以降の本丸は、西半部よりも約３m低い位置に設けられることになりました。この高低差は、本丸の天守台や外郭石垣を高くすることで解消していますが、江戸時代になっても地表レベルは二の丸より低いままという、全国でも稀な構造となっています。

太田時代の雰囲気を伝える２基の櫓

現存する畳櫓・卯寅口門脇櫓は城内で発生した火災で焼けた後、19世紀に再建された櫓で、「重箱造り」という１階と２階の床面積が同じ構造です。全国でも数例しか残っていないめずらしい櫓であり、この構造は安土桃山時代に流行するものです。1610年代以降は１階と２階の床面積を変化させる「層塔型」の櫓が主流となりますが、臼杵城では近世になってもこのような古式の構造を持つ櫓を建て続けています。この背景に「重箱造り」は「層塔型」にくらべて構造が簡便で、建築費用も安く抑えられることにあったかもしれません。臼杵城内には安土桃山時代の建築物は残っていませんが、現存する２基の櫓が、その当時の雰囲気を今に伝えています。

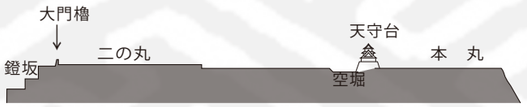


天守櫓跡出土瓦拓本

ミニ情報！

不落の城

石田三成派とされていた太田一吉は、慶長５年（1600）関ヶ原の合戦の時、東軍方の中川秀成によって攻められました。中川軍は、臼杵城を囲む海を泳いで城へ乗り込もうとしますが、太田軍の城内からの攻撃により全く近づくことができませんでした。中川軍がこの堅城に入ることができたのは、太田氏らが船で四国に落ち延びてしばらくしてからのことでした。

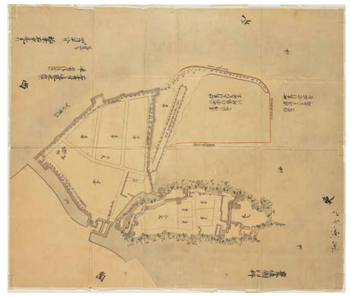


近世本丸と二の丸の高低差

乱世から泰平へ

近世稲葉氏の臼杵城（１）　1600 年～ 1750 年代

1640 年代の臼杵城絵図



臼杵城外郭改修
（1600 年～ 1640 年代）

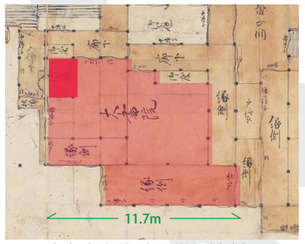
守る城から住む城へ－平和な時代に即した城郭へ

稲葉氏の臼杵入封は慶長５年（1600）のことでした。当時の臼杵城は太田氏の大改修によって近世的な城郭となっていたようですが、稲葉氏はさらに大手門の大改修と今橋口の新設、城内通路（縄張り）の大幅な変更を行いました。これによって旧来の本丸に一旦近づいてから二の丸に上る渦郭式縄張りから、二の丸を完全に陥落させないと本丸に近づけない連郭式縄張りとなりました。

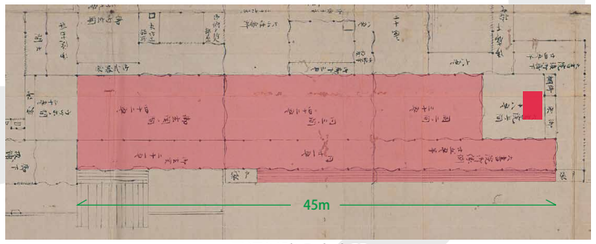
稲葉氏の改修は丹生嶋だけに終わらず、1600年～1640年代にかけて外堀にあたる堀川の開削、三の丸の惣石垣化、大手門桝形の南にあたる菊屋町の強制移転により水濠を拡幅、さらには城下南側の原山台地を掘り割り、城下自体を堀で囲むという「惣構」計画に着手しました。しかし17世紀後半には惣構計画も中断されてしまいます。このころには世の中も落ち着き、城下が外敵に攻められる心配もなくなったのでしょうし、過剰な城郭整備が幕府の目に障ることを恐れたのかもしれません。

城主の姿が遠くなる！！－延長 45mの大広間

５代城主稲葉景通は、本丸居館が老朽化した上に手狭であることから、幕府に二の丸へ居館を移すことを申し出、許可されました。延宝３年に完成した二の丸居館は、本丸居館に比べ城主の私的空間（奥）より、家臣との謁見や、外客との面談をする公的空間（表）がやや広く取られていました。ことにお目見え以上の家臣と謁見する大広間は全長約45mの大きな空間で、お目見えが叶う家臣であっても、その多くは殿様がどのような顔をしているのか、ほとんどわからなかったのではないかと思われます。



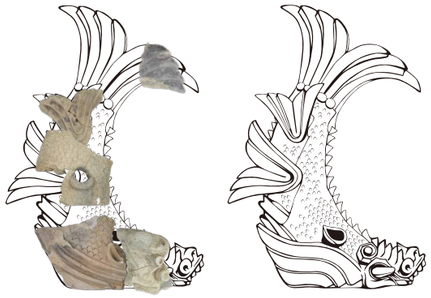
本丸大書院（17 世紀前半）



景通以降の大広間

城主の座
家臣の座

◀クルス刻印軒丸瓦
（時鐘櫓台出土）



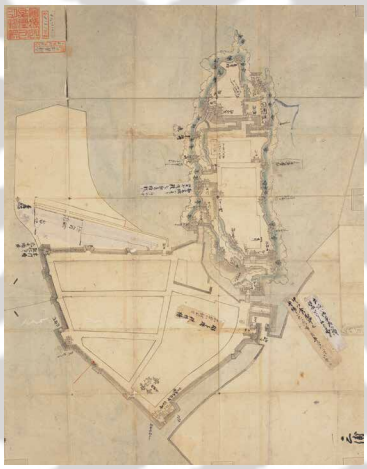
天守跡出土の鯱瓦

初　代	稲葉貞通	・・春日局の血縁者	九　代	稲葉泰通
二　代	稲葉典通	・・正室は多羅（細川ガラシャの娘）	十　代	稲葉弘通
三　代	稲葉一通		十一代	稲葉雍通
四　代	稲葉信通		十二代	稲葉尊通
五　代	稲葉景通		十三代	稲葉幾通
六　代	稲葉知通		十四代	稲葉観通
七　代	稲葉恒通		十五代	稲葉久通
八　代	稲葉堇通			

臼杵稲葉家　歴代城主

見せる城の終焉

近世稲葉氏の臼杵城（２）　1760 年代～ 1860 年代



18 世紀後半～ 19 世紀の臼杵城

平和な時代の「見せる城」

宝暦13年（1763）年、臼杵城内と城下の740軒の家屋が焼失するという大火事（宝暦大火）がおきました。二の丸はほとんど全ての櫓と、城主居館が焼失してしまったのです。
その2年後から二の丸建物の復旧が始まりますが、当時の臼杵藩は城の復興をまず、見える場所から行っていったようなのです。

守りの城から、権威を見せる城へ―この傾向は17世紀より18世紀以降のほうがよく現れているようです。城下の正面に向く二の丸鐙坂周辺の崖は17世紀後半になってもそのままでしたが、18世紀前半には石垣化されています。

近年この石垣の修理の際に、タイル状の薄い石を崖面に張りつけて石垣のように見せる部分が発見されました。

町からよく見える部分から櫓を再建し、見せかけの石垣を造るという18世紀以降の「見せる城」整備は、一方で今橋登城路の中ノ門・上ノ門を廃止するなど防御機能を低下させるものでした。“武士の価値”が武力から見せかけの権威へと変わっていることを示しているようです。

荒城から近代的公園へ

明治６年（1873）明治新政府は、全国の城郭を残すものと残さないものとに分けました（城郭存廃決定）。軍の施設にならなかった臼杵城は廃城と決定され、本丸・二の丸は当時新政府が進めていた公園制度による「公園地」に指定され、三の丸は宅地となりました。とはいうものの「公園」のなんたるかがまだ理解されてなかった臼杵にあって、臼杵城跡は荒れ放題となっていたようです。

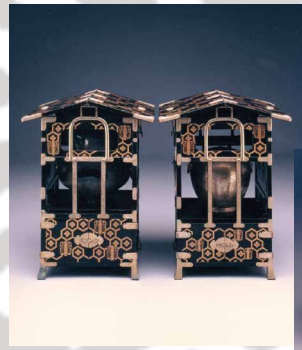
明治10年（1877）、二の丸居館跡に招魂社（しょうこんしゃ）が建立されると、境内と参道整備のためにやっと美観が整えられるようになりますが、これが公園整備の始まりでしょう。明治20年代には参道となった今橋周辺に桜が植えられ、これが桜の名所となるきっかけになりました。

本丸の公園化はやや遅く、明治末から大正の初めのころのようです。見事な高石垣であった本丸天守周辺の石垣は上部４ｍほどが壊され、残った部分は公園のモニュメントとして整備されてしまうなど、城郭遺構を公園化に活かすという発想はなかったようです。臼杵出身で三菱財閥の重役となった荘田平五郎はこれを嘆き、時代の流れではあるが、武士の最後の砦としての城郭景観を保全すべきと訴えています。

廃城直前の臼杵城
（1860 年代）

最初に壊された？天守櫓

平成20年度の発掘調査で、天守は他の櫓よりも念入りに丁寧に壊されていることがわかりました。慎重に壁や瓦をはがしていることから、おそらく柱などの木部材を他に転用する目的があったと考えられます。他の櫓跡の発掘調査ではこうした痕跡がありません。おそらく天守は最初の段階で壊され、他の櫓は自然に崩壊するものが多かったのでしょう。



中津城主 奥平家から 13 代城主に輿入れした鉾子姫（さくこひめ）の婚礼調度で、奥平家（おくだいらけ）の家紋（沢瀉（おもだか）紋、軍配紋）周囲の亀甲（きっこうもん）紋は、臼杵城の別名である「亀城」をイメージしたものといわれています。

臼杵市教育委員会所蔵

お城ミニ知識！

＊曲輪（くるわ）とは？
城内の役割や機能によってわけられる小区画。

＊渦郭（かかく）式とは？
本丸を中心に螺旋形に曲輪を造る。

＊連郭（れんかくしき）式（囲廓（かいろうしき））とは？
本丸を中心に同心円形、または回字形に二の丸・三の丸を造る。